台湾輔仁カトリック大学　臨床実習報告書①

はじめに

今回、私が留学を志望した理由は以下の３点です。

① 医師となる前に積極性（度胸）を獲得する

② 日本の医療を海外の視点から観察する

③ 英語学習のきっかけにする

将来、外国で医師として働きたいといったような大きな夢を描いているわけではありません。ただ、一度いつもと違う世界を体験してみたいだけでした。

出国前の準備としては、一般的な英語学習（TOEIC に向けた勉強）を半年と中学生レベルの会話練習を３か月、直前の一か月に医療英語の学習をしました。

輔仁カトリック大学について

11 学部を有する私立総合大学です。日本語学科とソフトクリームが有名なんだとか。1990 年に設立された医学部は国内 12 大学あるうちの１つで､現在立派な大学病院を建設中です。そのため学生は私たちが実習をした 3 つの協力病院に分散して実習をしています。

以下、時系列に沿って振り返っていきます。

１週目（5/16-5/20）　天主教耕莘醫院 Cardinal Tien Hospital

この病院は台北市の周囲を囲んでいる新北市に位置している、キリスト教関連の病院です。ここでは神経内科・中医学・心臓血管外科にて実習を行いました。

月曜日の神経内科では、事前に国内で予習してきた NIHSS を実際の患者さんに実践し、その結果をもとに教授と病態について討論を行いました。

水、金曜日は心臓血管外科実習でした。元々私たちの実習に合わせて大きな手術を組んでくださっていたらしいのですが、私たちの訪台直前になって実習日程が変更となったために少々迫力に欠ける実習となってしまいした。

木曜日はフジェンの医療通訳の学生さんに入ってもらい中医学の外来見学と柱医学概論の講義を受けました。中医学を施す中医師は台湾国内では通常医師免許とは別の資格として扱われており、患者も中医学科を自分で選択して診察を受けるという日本とは異なる制度で診療が行われています。講義では陰と陽、五行「もっかどこんすい」、五常、四つの診察方法(望診、聞診、問診、切診)、傷寒論(後漢時代にまとめられた、薬に関して書かれた最初の本)、６つの熱性、八法(８つの治療方法)、異痛同治等々難しい言葉が飛び交っていました。中医学の全体的な感想としましては、西洋医学よりも感覚的な面が大きく、本で勉強しただけではなかなか会得することができない技術であると感じました。

以下、この病院で聞いた台湾の医療事情をまとめています。
・キリスト系の病院であるから中絶は行わない
・ER は豚に噛まれた患者が結構くる(佐賀で田んぼに落ちるようなものか)
・救急車は有料２３００ドル
・９割公的医療保険がカバーしてくれるから、毎回の患者の支払いはとても安い。代わりに薬のためこみ・ドクターショッピングなどによる医療費の増加が深刻な問題となっている。
・医療費が安く保険料が高いために、普段は海外で生活して医療が必要になったら台湾に帰国するような輩もいるのだとか。
・terminal の患者の医療費は無料である。
・ガンマナイフが世界的に見ても最新のものでありこれを目当てに多くの患者が集まっている。
・美容外科があり、大きな収益を上げている。
・台湾では混合診療が可能である。
・台湾の医師には麻酔・皮膚科・眼科などが人気で、外科・救急は不人気。訴訟が多いことなどが原因で日本国内と同じ。
・この病院には一日約１万人の患者が訪れる。
・大学病院などの病院は給料は安いが名声を得ることができる。開業すると逆。これは日本と同じか。
・現在医学部の制度の変革期で７年生＋１年間の研修が数年後には６年生＋２年間の研修システムに変わるらしい。
・７年生は給料をもらいながら働いている。(が、授業料は払っている)
・４年生時に一回筆記の国家試験が有り、７年生終了時にも筆記と OSCE の国家試験がある２段構え。

5/17　輔仁大学見学

大学内を一通り見学したあとに留学担当の Dr.Lee と会食。先生の専門はがん転移の研究です。医学部校舎に移動し PBL 見学。そこには録画システム、タブレット、ノート PC の持ち込みハーフミラーを用いての PBL の様子の監視等佐賀大学にはないシステムが多く存在しており驚かされました。学生は基礎的なことも PBL の機会に取り上げて勉強しています。おしなべて佐賀大学より全体的に(先生も含めて)真面目に取り組んでいる様子でした。
この理由が全体の人数が少ないためか、監視の目が行き届いているためか、はたまた学生の意識が高いからなのか、理由はよくわかりません。その後解剖室、OSCE 室を見学しました。日本と比べて、学部学生の間の実践トレーニングを重視している印象を受けます。

２週目（5/23-5/27）新光吳火獅紀念醫院　Shin Kong Wo Ho-Su

memorial hospital

この病院は、台北の北側に位置しています。台湾五大財閥の一つ新光グループが経営する病院です。

この病院では私一人が循環器内科を選択し、他の三人は小児科で実習を行いました。

この一週間、一人のインターン（７年生）と一緒に行動します。１日は、7：30 のカンファレンスに始まり、午前中に教授とともに回診を行い午後はレクチャーを受けるといった流れでした。教授は毎日私たちに宿題を出されました。二次性高血圧の鑑別・患者の病態の把握・特発性肺線維症とは…といった感じです。一方の小児科組は、保育園に行ったり、国立台湾大学病院に行ったりと中々楽しそうに生活していました。おまけに金曜日は休みにしてもらったそうです。

　この病院には、国立台湾大学から実に多くの年配の先生が学生教育のために来られていました。最高齢は 85 歳の先生で、日本語を話すことができる方でした。このような大ベテランの先生と学生が１対 1 で症例検討を行う光景は日本ではなかなか見られないものであり、新鮮でした。

　木曜日にはカテーテル室見学をさせていただきました。先生方から聞いた話によると、日本の循環器医師のカテーテルレベルは相当高く、台湾の多くの先生が日本に修行に行くそうです。

以下、印象に残ったことを羅列します。

・とある日のカンファレンスの内容は「マッシュルーム中毒について」。台湾では患者数が多いのだろうか。

・カテーテル検査に関して、異常に患者の回転がはやい。

・インターンには当直の義務がある。月に８回。ただし日中は佐賀大学の実習と同じように予定表に沿って一日を過ごしている。あちらの７年生は日本の学生実習と研修医の中間の存在であるようだ。

・台湾の循環器界にはこの国特有の「13signs」という心不全診察方法がある。

・インターンが近日中に卒業するとのことで撮影していた卒業記念余興ムービーに参加することになった。笑いのツボは日台で近いようである。

3 週目（5/30-6/3）　國泰総合醫院　Cathay General Hospital

台北 101 の近くにある病院です。この病院も台湾５大財閥の一つである國泰グループによって経営されています。この一週間、私と同級生 N さんは感染症科で、ほかの二人は一般外科で実習を行いました。私は、４月に感染症内科の選択実習を日本で受けていたために多少抗菌薬に対する知識を持っていましたが、もう一人の彼女はまだ抗菌薬の勉強をしておらずかなり苦戦しているようでした。

　感染症科は佐賀大学感染制御部と同じように毎日回診を行っており、それについていくのが一日の基本的な実習でした。一人の Dr が 20 人を超える患者全員を診察するので毎日

２時間を超える回診となります。一人、中国大陸から転院してきた患者さんがいました。この方はあらゆる耐性菌をこの病院に持込んでおり、先生曰く「中国からの細菌兵器」だそうです。ブラックジョークです。

月曜日と金曜日には症例検討会＆レクチャーがありました。月曜日の内容は、髄膜炎に関してでした。日本では、成人の髄膜炎は肺炎球菌・インフルエンザ菌が起炎菌の大半を占めるが、台湾では、クレブシエラ、肺炎球菌、大腸菌という順番になっています。一般に感染症の起炎菌の違いは国家間のみならず地域間・病院間でも見られるため、適切な治療を行うためには local な情報を仕入れる必要があることを体感しました。

金曜日は、カテーテルの種類と CRBSI、真菌に関する話でした。CV カテーテルでの感染リスクを減らすための合言葉として「選手大消除」というものがあるそうです。選：適切なカテーテルを選ぶ　手:手を洗う　大:マキシマルバリアプレコーション　消：クロルヘキシジンで消毒　除：できるだけ早くカテーテルを取り除く　の意味を指しています。

先生と結核に関して話をする機会がありました。日本は先進国の中で結核罹患率が高いといわれていますが、台湾の罹患率はその日本の数倍です。回診中も結核が鑑別診断に挙がる患者さんが何人かいました。

カンファでは必ず法律的な問題を議論する決まりとなっていました。日台の医療を取り巻く法律の違いが垣間見える瞬間です。

まとめ

台湾の（医療）環境を見てまず感じたことは、日本は恐ろしく清潔な国だということです。日本は、国民各々の医療に対する意識の高さも世界トップレベルでしょう。そして、いろいろなものが繊細で几帳面、システマチックです。このことは日本が長寿大国であることと少なからず関係しているのだと思います。この点は間違いなく日本の長所です。

一方、過度なシステマチックさ故に心の余裕を無くしかけているのではないかと感じます。台湾では医師－患者の双方が相手に優しさをもって接していました。病室で医師と患者が手を取り合う光景を幾度となく目の当たりにしました。この関係性は私たちが見習うべき点です。

医学生についても見習う点は多くありましたが、一番着目すべき点は、彼らの視野が国内にとどまっていないことだと思います。彼らはレベルの差こそあれ全員が英語で日常会話をすることができます。３か国語勉強するのも珍しいことではないようです。留学経験者も少なくありません。日本では日本語の教材が充実しているため、英語を勉強しなくてもどうにかなってしまうというある意味で幸せな状況があります。これこそ私たちが英語学習に対する危機感を持たない一因なのかもしれません。

この実習が始まる前、英語力は十分ではありませんでしたし不安も大きかったですが、ともかく参加してよかったというのが感想です。

最後に

　このたびの経験は、間違いなく自分の将来に活きるものになることと思います。留学に際しましてご支援いただきました先生方、並びに佐賀大学・医学部後援会・医学部同窓会の皆様に厚く御礼申し上げます。

台湾輔仁大学実習報告書②

私は 2016 年 5 月 16 日～6 月 3 日にかけて、交換留学生として台湾の輔仁大学で実習をしてきました。この実習を通して、海外での臨床実習に加え、現地の学生との交流や、寮生活など、多くの経験を積むことができました。

〔志望動機〕

大学 3、4 年次の医療英語の授業を受けた頃から、講義で学習していることはどのようなところで生かされるのだろうと感じるようになったことがきっかけとなり、海外での臨床実習に興味を持つようになりました。5 年次の臨床実習では、英語論文を読んだり、外国から来られている医師とコミュニケーションをとる場面があったりと、座学で学んだ医学英語を用いる機会が多くありましたが、そこで満足に医学英語を使うことができませんでした。そこで、実用的な医学英語を使う実習を経験したいと思ったことがこの実習に応募した大きな理由です。また、実習先として台湾を選んだのは、旅行で台湾を訪れた際に、台湾の人々や文化に触れた時、日本との違いや共通点を知り、もっとこの国やこの国の人々について知りたいと思ったからです。このような理由から、台湾輔仁大学との交換留学プログラムに応募しました。

〔実習について〕

留学先の輔仁大学医学部医学科は、新しい学部（学科）で、附属病院がまだ整備されていませんでした。そのため、私たちは、普段、輔仁大学の学生が臨床実習を行っている 3 つの病院で、輔仁大学の学生と一緒に臨床実習を行いました。実習先は以下の通りです。

5 月 16 日～5 月 20 日：Cardinal Tien Hospital（神経内科、中医学、心臓血管外科）
5 月 23 日～5 月 27 日：Sing-Kong Wu Ho-Su Memorial Hospital（小児科）
5 月 30 日～6 月 3 日：Cathay General Hospital（一般外科）

第 1 週目の Cardinal Tien Hospital では、3 つの診療科を少しずつ実習しました。神経内科では、朝のカンファレンスや、NIHSS の診察を経験しました。朝のカンファレンスは多発脳梗塞の症例についてのプレゼンテーションがあり、英語で画像所見を述べるように質問されました。初日の朝ということで、この時はあまり上手く答えることができませんでした。カンファレンスが終わると、事前課題として提示されていた NIHSS の診察を実際の患者さんに行いました。患者さんは台湾語しか理解することができないので、輔仁大学の学生とペアになって、彼らの力を借りながらの診察となりました。患者さんは台湾語を話すことのできない私たちの診察を快く受けてくださり、診察中もとても協力的でした。診察の後、神経内科の上級医に、診察所見についてプレゼンテーションを行いました。先

生は、学生指導にとても熱心で、患者さんの鑑別診断について考えたり、鑑別の仕方について教えてくださいました。その後、脳卒中の分類とそのリスクファクターについてのレクチャーを受けました。指導やレクチャーは、常に先生から、私たちの考えを述べるように言われ、私たちが何か答えなければ前に進まないというような形式でした。先生は、私たちのどんな意見や考えも決して無視することなく、ひとつひとつ問題を解決してくださいました。中医学では、外来の見学や、中医学の基礎についてレクチャーを受けました。中医学の実習では、英語でのコミュニケーションが難しかったため、輔仁大学の日本語通訳学科の大学院生が通訳をしてくださいました。中国医学の考え方の基礎をしっかりと学ぶことができたことに加え、日本の医療現場でもよく用いられている漢方の処方に対する考え方や、西洋医学と東洋医学を比較して、それぞれの長所と短所について考えることができて、とても新鮮な実習となりました。

Cardinal Tien Hospital は新台北市にある地域の中核病院でした。そのため救急外来では、いつも多くの患者さんが診察を待っていました。そのような光景から、ここでは台湾の保険制度の問題などについても知ることができました。

第 2 週目の Sing-Kong Wu Ho-Su Memorial Hospital では、小児科と循環器内科に分かれて実習を行いました。私は小児科で実習をしました。小児科では、毎朝 7:30～約 1 時間、朝食をとりながら、症例について報告したり、論文を抄読したりといったカンファレンスがありました。このカンファレンスは通常、中国語で行われるということでしたが、私たちが実習している間は全て英語で行ってくださいました。英語でのプレゼンテーションは難しいということでしたが、どの医師や学生もしっかりと英語で発表していました。ここでの質疑応答はとても活発で、後期研修医が提示した 1 つの症例について、上級医が意見を闘わせるようなこともありました。カンファレンスの他には、病棟回診をして喘息の子どもの聴診をしたり、新生児室で正常新生児についてのレクチャーを受けた後、実際に診察手技の指導をしてもらったりしました。ここでは、回診などのひとつのイベントがあるとその後、ほとんど必ず、それに関してのフィードバックをしてくださったことがとても勉強になりました。特に、呼吸細気管支炎の症例と喘息の症例を比較して、鑑別の仕方や治療の仕方について先生と一緒に考えたことがとても印象に残っています。

この病院は、台北市の士林という地区にあるメディカルセンターの認定を受けた病院でした。そのため、Cardinal Tien Hospital とは扱っている疾患や、患者さんの要望が異なるということでした。

第 3 週目の Cathay General Hospital では、一般外科と感染症内科に分かれて実習をしました。私は、一般外科を選択しました。ここでは手術見学と回診を中心に実習を行いました。手術見学では、初めてみる手術も多くあり、とても面白かったです。特に、胃潰瘍

穿孔に対する胃全摘術などは、日本では内視鏡の普及が進み、なかなか見ることができないということだったので、見学できたことはとても貴重な経験となりました。一般外科では、日本と台湾ではこのように疫学的に異なる部分があるということを知ることができました。回診では患者さんの回診をした翌日に、その患者さんについて英語で先生にプレゼンテーションをするという課題がありました。慣れないカルテを用いて、2 時間ほどで英語のパワーポイント資料を作成し、発表の準備をするのはとても難しく、輔仁大学の学生の力を借りて、なんとか作り上げることができるというほどでしたが、英語でのプレゼンテーションを作るという経験ができたことはとてもいい経験になりました。

この病院も Sing-Kong Wu Ho-Su Memorial Hospital と同じくメディカルセンターの認定を受けた病院で、台北市の中心にありました。ここではそれまでの病院よりも、さらに先進的な医療が行われているという印象を受けました。

上記のように 3 つの異なる病院で実習し、それぞれの病院を比較することで、市街の病院と郊外の病院とでは抱えている問題が違うといった、台湾の医療事情ということについても知ることができました。また、多くの病院、多くの実習科を回ったことで、たくさんの先生方、学生に出会うことができました。どの病院でも、私たちの実習を快く受け入れてくださり、熱心に指導していただきました。英語で行われるレクチャーや、どのレクチャーでも、まず自分の考えやプランを提示するというやり方は、難しいと感じることも多かったですが、とても新鮮で、本当に勉強になったと感じています。また、実習を通して、友人に助けられることも多く、台湾の学生と様々なコミュニケーションをとることができたことで、彼らが台湾で今後医師としてどのように働いていくのかというような話をすることもでき、私にとって、とても充実した時間となりました。

〔寮生活について〕

もうひとつ、今回の台湾実習を通して、経験することができて非常に良かったと感じていることがあります。それは、寮生活です。それぞれの病院が提供してくださる寮で生活をしました。どの部屋も 4 人部屋で、台湾の学生や他国からの留学生と相部屋になることもありました。その中で、生活の時間の中でしかできないようなプライベートな話をし、いろいろな国の文化なども教えてもらい、日本のことについても説明するようなことが多くありました。このような時間を過ごし、いろいろな国のことについて知ることができたことが、とても面白かったです。また、一緒に台湾に行くことになった 4 人の佐賀大学の同級生と、多くの時間を共に過ごして、意見を交わすことができたことも、普段、1 人暮らしをしている私にとって、とても新鮮なこととなりました。

〔今回の台湾交換留学を通して〕

今回、3 週間台湾で過ごし、実習をして、私が最も強く思ったことは、もっと広い世界へ

目を向けていかなければならないということです。そのひとつとして、語学力が挙げられます。台湾の医師や学生は、とても英語に精通しています。その理由を尋ねると、大学入学試験において英語力はとても重要視されるということに加え、教科書などの医学教育のための図書が中国語では完全に確立していないため、英語のもので勉強するしか方法がないということでした。また、このことを話してくれた学生によると、日本は日本語の教科書が揃っており、とても恵まれているから、無理に英語を学ぶ必要がないのではないか、ということでした。私はこの話を聞いて、私たちの医学教育がとても整備され、充実しているということを認識したのと同時に、私たちは、日本語の教科書でしか知識を得ることができないために、台湾の学生よりも少し遅れた情報しか手に入れることができないのではないかと感じました。今回、実際に英語で実習や生活を経験したことで、自身の英語力が足りないことによって、患者さんの情報を的確に伝えることや先生からの指導も完全には理解できない部分があること、友人とより密なコミュニケーションをとりたいと思っても、なかなか伝えられないことが多くあることを実感しました。台湾へ行く前は、日本で医師として働くにあたり、英語力はどれほど必要なのかと思っていましたが、たとえ日本で働くとしても、新しい知識や他国の医師と議論をするためには語学力がとても重要であり、求められているのだと強く思うようになりました。そして、日本で働いていても世界を意識し、語学力を身につけることが、より多くのことを、十分に知ることができる手段であると感じるようになりました。

今回の台湾実習では、これまで述べてきたような本当にたくさんのことを学び感じることができました。今回の実習にあたり、日本、台湾の両国で関わってくださった先生方、実習を手助けしてくれた学生の皆さん、費用の面で援助をいただいた佐賀大学・医学部同窓会・医学部後援会の皆様に深く感謝いたします。今回与えていただいたこの機会で得たものを今後の医師としてのキャリアに充分に活かしていくことはもちろんのこと、より多くの人にこのことを知ってもらえるよう、活動していきたいと思います。貴重な経験をさせていただき、本当にありがとうございました。

台湾交換留学報告書③

留学先病院

5/16-5/20 Cardinal General Tien Hospital

5/23-5/27 Shin Kong Wu Ho−Su Memorial Hospital

5/30-6/3 Cathay General Hospital

① 今回の志望動機

子供の頃より将来海外において医療活動をしたいという思いがあり、台湾は医療において先進国ではないと思っていましたが、他国の学生・医師がどのような環境、考えのもとで医療を行っているか、また台湾は日本と島国という点で似ており、どのような問題が起こっているかにも興味があったため今回のプログラムに応募させて頂きました。

② 実習内容

★一週目

一週目は、Chinese Medicine を選択していましたが、月曜日はNeurology、水・金はcardiovascular surgery の見学となりました。Neurology の教授は前の学長らしく、とても教育熱心な方でした。朝のカンファレンスも私たちのために症例報告をしてくださったり、実際に患者さんで NIHSS、神経診察をさせて下さったり、その後、どこの障害が考えられるかや、脳卒中の考え方についてレクチャーをして下さりました。患者さんの中には日本統治時代を経験しているため、日本語を話すことができる方がいらっしゃり、私たちが訪れるととても喜んでくれました。

Cardiovascular surgery では、私たちが一週間前にくると思い手術を組んでいたらしく、シャント形成の手術しか見ることができませんでした。

Chinese medicine では、わざわざ私たちのためにFu-jen大学の日本語学科の学生が通訳をしにきてくれました。実際の鍼治療をみたり、先生にしてもらったりして、午後は漢方についてのレクチャーをして頂き、とても有意義な1日となりました。台湾では西洋医学の医師が漢方を処方したり鍼治療をしたりすることはなく、日本と大きな差だと感じました。どちらの治療法を選ぶかは患者さん次第だそうです。

★二週目

二週目は小児科を選択しました。小児科には浜松医科大学を卒業し、日本で医師経験もある女医さんがおり、ほとんど日本語で過ごすことができました。実習内容は回診や外来、nicu や新生児室、を見させていただいたり、レクチャーもして頂きました。幼稚園の検診にも連れて行ってもらい楽し

い時間を過ごすことができました。実習全体を通して小児科において、日本と大きく変わったところは特にないように思いました。外来の人数が多いにも関わらず先生は毎度説明して下さり大変勉強になりました。
ご飯にも度々連れて行ってもらうなど、とても楽しい一週間でした。

★三週目

三週目は感染症で実習をさせて頂きました。主な内容は、meeting, レクチャー、回診でした。ここでも普段は中国語で行われているのをすべて私たちのために英語でして下さいました。感染症では 70 歳の先生についていましたが、患者さんへの対応もとても丁寧で、英語も流暢で素敵な先生でした。学生は全員感染症を回り、抗菌薬の使い方などのレクチャーもあり、台湾では日本よりも感染症が重要視されているのだと感じました。私はあまり勉強していなかったので、少し大変でしたが、先生に聞かれて分からないところは、台湾の5年生が助けてくれたりなど、三週間のうちで一番勉強になった週だと思います。日本に帰ってからしっかりと勉強しなおさなければと感じました。
三つの病院を通して感じたことは、日本の医療制度ととても似ているということです。似ているからこそ起きている問題も同じようだと感じました。台湾特有の問題としては、海外に住んでいたとしても、医療費が保険でカバーされるため、わざわざ台湾に帰ってきて医療を受けたり、台湾の場合には大きな病院に行くのにも 100 元くらい払えば行けてしまうので、軽症の人でもみんな大病院に集まってしまうという問題がありました。ただ、国家資格の試験に OSCE を導入したり、軽症であれば救急車を呼んだ際にはお金をとるなど、日本よりも進んでいる点もあると感じました。

③ Fu-jen University の学生とのかかわり

初日から、最終日まで、本当にたくさんの学生と毎日遊んで、いろいろな所へ連れて行ってくれました。大学生活の中でこんなにも毎日遊び歩いたのは初めてくらいの勢いでした。一学年40人程らしいのですが、半分ほどの人たちにはお世話になったと思います。ここは日本と大きな差だと思いました。日本の学生（佐賀大学だけかもしれませんが、、、）はあまり積極的に交流をする傾向にないと思います。それが悪いとかいうわけでは全くありませんが、少しでも興味があったら絶対にいろんな機会に参加したほうが良いなと思いました。また、台湾の学生は自分の国の歴史や状況についてちゃんと考えを持っています。なぜかと聞いたら、台湾の歴史は浅い、短いからわかりやすいからだ、と言っていましたが、その点は本当に尊敬できて、素敵なところだと思いました。

④ 反省・今後の展望

今回の実習に行くにあたり、特にこの留学のために準備したことはありませんが５年生の頃から、

ネットでの英会話、USMLE の First Aid を少々やっていたことは役に立ったのではないかと思います。台湾の医学生は TOEIC900 点超えが当たり前だということで、みんな英語を話すことができました。中国語の教科書もあるのですが、情報が古いということでみんなあまり使わないらしく、カンファレンスなどで、三年前の情報をだすと、古いと先生に怒られるため、常にネットなどを使い新しい情報を仕入れるようにしているとのことでした。日本では、ガイドラインでもなんでもほとんどの学生は翻訳されるのを待っており、その点は見習うべきだと感じました。実習でも、日常でも言っていることは理解できるのですが、自分の言いたいことをしっかりと伝えるのは難しく、もっと早いうちから、計画性を持って将来自分のしたいことには何が必要なのかを考え、行動する必要があったと思います。また、日常会話で、歴史認識や、原発についてなどの、少し深刻な問題にも自分の考えに自信を持って話すためにはもっと英語の勉強が必要とともに、歴史や社会事象についても幅広く勉強しておくべきだったと感じました。今回の留学を生かし、今後も英語の勉強を頑張ろうと思います。また、繰り返しになりますが、始めの疑問であった、島国に共通する問題点があるのか、という点ではやはり日本統治時代もあったことから医療制度も似ており、問題も類似しています。しかし決定的な違いは、台湾の多くのドクターが世界を見ているということだと思います。彼らは、それは、台湾が小さい国であり、自国だけでは成長することができないからだと言っていました。日本はすべて自国で賄うことができ、満足した生活を多くの人が送ることができるから、英語を話す必要もないし、外に出ていく必要性もない、と言っていました。私は、日本人全体が、あまり英語が話せないのをただ恥じていただけだったので、そのような意見はとても新鮮であり、貴重でした。この話を聞いて、日本の医療はまさしく携帯電話と同じようにガラパゴス化しているのだと感じました。ただ、これから日本では高齢化はますます進み、外国人が必ず増えていくのではないかと思うと、もっと世界をみて加わっていくことが大切だと思いました。

最後に、今回、このような貴重な機会をくださった皆様に心から感謝いたします。本当にたくさんのことを学び感じ取れ、考えさせられた3週間でした。
今後とも、佐賀大学と Fu-jen 大学の良い関係が続くことを心から祈っています。

台湾臨床実習報告書④

・実習一週目～天主教耕莘醫院（Cardinal Tien Hospital）～

一週目では神経内科、輔仁大学医学部見学、心臓外科（CVS)、中医学に参加しました。ただ残念なことに心臓外科は先生が実習期間を勘違いされていたのか空き時間が多かったので、付近の散策に・食べ歩きとなりました。

神経内科では前日に「NIHSS と神経診察を予習するように」と輔仁大の学生から聞いていたので確認してから臨みました。朝カンファで自己紹介をした後、早速英語でのケーススタディが始まりました。レジデントや Post-graduated-year（PGY ; 日本でいう初期臨床研修医）が Chief Complaint（主訴）, Present illness（現病歴）, Past history（既往歴）, PE（身体所見）, Lab data（血液検査所見）, CT などを説明していました。カンファ後は、レジデントたちに連れられて実際の患者に NIHSS や神経診察をさせてもらいました。そして、神経内科教授の Dr.Yip より、得られた所見から疾患（今回は脳梗塞）の局在を特定するレクチャーを受けました。ディスカッションを交えながらのレクチャーは PBL を思い出されました。

中医学（Chinese Medicine）とは、普段僕らが学んでいる西洋医学と全く異なる理論で患者を診ていく医学でした。人間が本来持っている陰と陽の気の流れを整えることで症状を緩和していくことを基本としていました。そのために僕らが普段漢方薬と呼んでいる生薬や鍼灸を用い、診断も「四診」というものによって行います。西洋医学のように採血や検査をすることはありません。四診（ししん）とは、望診、聞診、問診、切診の四つをもって四診と呼びます。

輔仁大学は総合大学で医学部以外の学部も同じキャンパスにたくさんありました。また輔仁大学はまだ附属病院がありません。来年には完成するそうです。そのため学生たちは台北市内の市中病院で臨床実習を受けています。大学の見学は、朝学生たちが自家用車で寮まで迎えに来てくれるところから始まりました。高速に乗って大学につくと、日本語通訳学科の学生が一日お世話をしてくれました。午前中に大学を散策し、今回の交換留学の責任者である Dr. Lee と近くのレストランで昼食をとりました。専門は生化学だそうです。午後はまた大学に戻り、学生たちが PBL を実際に行っている様子を見学させていただきました。PBL 室にはマジックミラーがついており、外から先生が監視・採点をするそうです。そのため学生たちの発表や質疑応答は大変活発なものでした。先生は台湾の学生は日本の学生と違って怠けますからとおっしゃっていたのですがそれにしてもとても有意義な PBL に思えました。また、臨床医学だけでなく基礎医学も PBL で行うそうです。その後国家試験の OSCE で使用する部屋に行き、実際に器具を体験させてもらいました。試験項目は身体診察に加えて、採血、出産介助など幅広かったです。

・二週目～新光吳火獅紀念醫院（Shing-Kong Hospital）～

二週目は小児科と循環器内科から選べて、僕は小児科を選択しました。毎朝レジデントや学生によって発表される症例検討会から始まりました。発表はすべて英語だったのですが、普段は中国語で行うと聞いて驚きました。みなさんがとても流暢に英語で発表するので、やはり台湾の学生の英語力は素晴らしいと思いました。また、日本と違う、台湾のいいところとして議論が大変活発でした。教授や他の先生がどんどん発表者に質問をしていき、学生やレジデントもそれにしっかりと対応していました。重要なのは、議論はあくまで症例についてで、発表者の勉強不足をたしなめるような発言はなかったように思います。文化の違いでしょうか、僕にはそれがとても魅力的に感じました。

朝会を終えると Dr.王の回診についていきました。Dr.王の回診や OPD（外来）はとても丁寧かつ迅速で、なおかつ患者それぞれの説明を僕らにしていただきました。台湾では OPD で医師は患者と中国語で話し、カルテは英語で記載します。そのため患者にとっては先生の言葉が重要で、患者と医師の信頼関係はとても良好に見えました。

NICU・新生児室では新生児の理学検査についてのレクチャーがあり、その後実際の乳児に行うことができ、モロー反射や、吸啜反射、先天性臼蓋形成不全のチェックなどを経験しました。

また、一日だけ幼稚園実習もあり、近くの幼稚園に伺い健診の様子を見学しました。その幼稚園は日本人居住者の多い地区にあり、台湾人や日本人、ヨーロッパ人の園児たちが混じって過ごしていました。先生たちは中国語と日本語で話をしますし、園児同士も日本語と中国語を混ぜて話していました。しかし不思議なことに、日本人の園児は両方を理解しているのですが台湾人の園児は中国語しかわかりません。会話が成り立っているのか非常に不思議でしたが、みんな楽しそうで何よりでした。

水曜日の午後からは偶然月に一度の小児科総会が台湾大学であるとのことだったので、参加し、各病院が持ち寄った症例発表を聞きました。

・三週目～国泰総合醫院（Cathey General Hospital）～

三週目は感染症と一般外科から選べて、一般外科を選択しました。見学した症例は食道静脈瘤の外科的結紮（杉原法）や消化管穿孔の縫合、乳房 Paget 病の乳房亜全摘、肝細胞癌の肝区域切除など様々でした。市中病院だからか、いずれも症例が Common なものでした。また手術器具も daVinci S があったり、業者が HARMONIC ACE®+7 を試験しに来たりもしていたので日本と同様で新しいものを使っていました。オペ中にふと、輔仁大の学生を見ると iPad でカルテや、CT 画像などを閲覧していたのがとてもびっくりしました。院内なら学生でもアクセスできるそうです。

午前中は手術見学が主で、午後は回診や OPD（外来）見学でした。木曜日の午後は Dr. Lang の患者についてパワーポイントを作成しディスカッションしました。英語での発表およびディスカッションは大変でしたがなんとか乗り越えました。金曜日だけ汐止（Shizi）

にある、分院で手術見学と Dr. Cheng による肝細胞癌の診断・治療に関するレクチャーがありました。台湾では肝細胞癌を診断するための検査項目で PIVKA-Ⅱは計らないそうです。

・謝辞

今回の台湾臨床実習に際し、選出および出発前の手続きをしてくださった佐賀大学の小田先生、福森先生、青木先生、木本先生、また台湾での実習でお世話をしてくださった Dr. Lee, Dr. Yip, Dr. 穆, Dr. 王, Dr. Lang, Dr. Cheng を始めとするすべての先生、佐賀大学および医学部同窓会・医学部後援会に多くのご支援とご指導を賜り、深く感謝しております。ありがとうございました。まだまだ自分自身の至らなさを実感できた三週間であったので、今後の努力の糧にしていこうと思っております。